

地元の魅力MAP

原市場地区の概要 <参考資料:飯能なんでも大全集より、郷土史から>地元の歴史や風土記を洗い出してみました

原市場は、飯能、第二地区の西、名栗川の谷間にあり南高麗と背を合わせている。

県道飯能・名栗線を名栗川に沿ってさかのぼり、小瀬戸地区新寺を直進すると曲竹くせだけ、上・下赤工あかだくみ、原市場、唐竹、赤沢に通じ、右に道をとれば中藤三郷、中沢に至る。

旧原市場村は市が立ち原市場という村名になったという。元禄の頃には既に原市場の名が付けられていたというから、おそらく江戸初期あるいはそれ以前のことであったらしい。それ以前は中藤含め日影郷と呼んでいたというが、谷のせまいこの一帯を言い得て妙な命名である。

幕末、原市場、唐竹、赤沢村は一橋領、曲竹、上・下赤工、中藤三郷は田安領であった。廃藩置県の後、明治4年末には入間県高麗郡に配され、同7年 曲竹は原市場村に編入された、同22年8村合併し原市場村になる。昭和18年 入間郡に属するところとなり、同31年 飯能市と合併し現在に至る。当時まで吾野地区に属していた南地区の中沢が原市場地区に編入された。

江戸中期中期原市場村だけで紙漉き業者が36人あったというが、現在ではその残滓さんはどこにもない。明治8年の戸数が513戸、加治地区の同年415戸と比較すると、文字通り今昔の感がある。

明治初期の仏教を抑圧、排斥した「廢仏毀釈」又は「廢仏棄釈」により、多くの寺が打ち壊された。



県道70号線 二の瀬橋(入間川)横の看板

原市場東自治会 はらいしばひがし自治会

1.所帯数

- 江戸末期 原市場村36軒の一部、曲竹村13軒
- 明治8年 原市場村135軒の一部
- 昭和38年 58世帯
- 昭和57年 103世帯
- 平成26年 201世帯 (現在)



大正橋から下流の風景



曲竹会館(曲竹地区)

2.自治会範囲

- 曲竹くせだけ
- 房ヶ谷戸ぼうがやと
- 金山かなやま の地区

3.集会所

- 曲竹地区集会場/曲竹会館くせだけかいがん
- 房ヶ谷戸地区集会所/鶴鳴館かくめいかん、
- 金山地区集会所/金龜館 きんきかん



鶴鳴館(房ヶ谷戸地区)



金龜館(金山地区)

4.地域の特徴

小瀬戸以西、原市場の宿に至る間の入間川北側一帯の細長い地域房ヶ谷戸から、中藤野ヶ崎へ越す山王坂の麓に、誰が付けたのかその名も鶴鳴館と呼ばれる原市場東集会場がある。(現在は房ヶ谷戸観光トイレ設置)

ここには明治初年の「廃仏毀釈」運動の煽りで廃寺に追い込まれた寺跡がある。

南高麗下直竹長光寺の末寺で、無量山曹洞宗西光寺といった。古開山は長録元年(1457)以前で原市場地区では古い方だ。

西光寺へは川端から真っ直ぐに広い参道が延びていて、山門があった。本堂は墓地前の梅林に建っていた。

この西光寺廃寺跡の墓地に巨大な板碑群がある。詳細は旧西光寺後に 阿弥陀三尊種子板碑 四基 (市指定文化財、鎌倉時代)参照



この板碑のある房ヶ谷戸の上流の地続きに地名 金山がある。そしてここにも同じ長光寺末寺の長福寺があつたが、西光寺と同時期(推定)に廃寺となっている。本堂は改修されながらもいまも存在し、山号(金龜山)からとられたものであろう金龜館と呼ばれて地区の集会所と利用されている。

金山の「金」を冠った地名のところは、ほとんど例外なく製鉄、鍛冶、鉱山などが過去において営まれた地なのだという。

また、それら産鉄地帯にはその作業に従事した職人たちが、大抵の場合は彼らの守護神として「金山神社」を祀ったものだという。

だが、この金山にはそれがなく「叶神社」が、この元長福寺と境内を共にする山麓に祀られている。

「叶」は「かのう」(金生)で”金が生まれる”なのである。したがって「叶神社」も「金山神社」同義語だということになる。



金山地区



房ヶ谷戸地区

5.地域の概要と特色

原市場東自治会は川上より金山/房ヶ谷戸/曲竹の三地区でどれも読みにくい地名

「詳しく地理を察すれば、名栗谷より捷径しょうけい(近道)も此処ここに会し、二、三の小渓谷も此処に其の口を開いている。されば彼方の洞、此処の岬みねより山の人々が集まり来て物資の交易」

と「武蔵野歴史地理」は大正四年当時の原市場の活況を記している。



曲竹地区

曲竹には真野という姓が多くその本家がある。先祖は豊臣秀吉の家臣で真野豊後守頼村で大名であったが大阪城落城でこの地に落ちのびてきて定着したといわれる。この本家には代々伝えられてきた短刀とお墨付きがあったが、青梅の御岳神社に奉納されたという。

真野豊後守とは、事実、10万石もの高禄の武将だったらもっと史上にその名を残していてもよいのではないかと思うのだが、一向に見いだせない。役どころや業績、逸話など、まったく見られないのはなぜか…

～奥武藏原市場の今昔～より抜粋

大阪夏の陣における両軍の布陣図に三の丸に濠をはさんで東軍の山内忠義と対峙している間に「真野頼包」の名が見える。ここでは「邑むら」でなく「包」となっている。曲竹地区に伝えられる話が、幾世代も経るうちに、似たような字だから包から邑へと誤って書かれ、やがて文字は消滅してしまって口伝でただけが“むら”として今日に伝えられてきたとも考えられなくもない。

大阪落城の際に逃ってきた男が、曲竹真野家の大租となったと伝えられ、その墓だといわれる墓域は、立派な宝篋はこ印塔や青石塔婆片(割れたかけら)、舟形墓碑などが立ち並び、由緒ある家柄であろうことはだれの目にも想像される。判読可能なものだけでも、最古が建武三年(1336)造立の板碑である。

大阪落城の遡ることおよそ280年、すなわち、真野家がはじまったとされる時期(1615年ころ)よりも、墓の方が少なくとも280年も以前にそこにあったことになる。この時期の矛盾をどう解釈すればよいのだろうか、最大限善意に想定すると、次のような推理も成り立つ。

真野家は南北朝時代(およそ1330～1390)、あるいはそれ以前からこの地に住んで勢力を張っており、いつのころか豊臣に召されて西方に赴任していた。そして落城の際に豊後守は三男を呼び「真野家墳墓の地は武蔵国曲竹村なり。汝なんじはこの戦火を逃れて彼の地へ落ち、家名を嗣ぐべし」と諭して脱出させた。以後代々、豊後守の旨を継いで一族は大いに栄えた、とでも考えなければ理屈に合わないし、大阪から徳川勢力下の関東曲竹までこなくても、もっと近くで隠棲には格好なちはいくらでもあったろうにと思われる。

ところが出版された史書には、次のようなことが書かれていた。「真野豊後守は助宗の子で、父を継いで七組番頭の一人。大阪落城を前にして逃亡し、藤堂高虎に仕える」と、いうだけの古文だった。

諸説いろいろあるが、豊後守につながる人物の子孫であったとしても、現真野家と結びつきは不明である

(参考:ふるさと漫録～奥武藏原市場の古昔～)

6.地域の見どころ



金山地区 入間川の流れ橋



房ヶ谷戸地区大正橋から下流風景



曲竹地区おおぎばしから下流風景

7.原市場の地名

<参考資料:「郷土史の研究Ⅰ」原市場の地名と屋号より抜粋>

7-1.語源調査

原市場郷土史研究会が昭和53年3月発足し「地名と屋号」を発表した。
地名表の読み方と、現地の呼び方の異なるものが多数あり、出来るだけ併記。
名栗川か、入間川か。風土記稿によると久林と下名栗の境から上流を名栗川、
下流を入間川としている。明治になって飯能の岩根橋付近より上流を名栗川とし、
今も沿岸の人々は名栗川と呼び親しんでいる。
しかし、現在は正式には名栗川とは呼ばず、水源から入間川という。二の瀬橋、
石原橋、には入間川の名が刻まれている。

7-2.地名の変遷へんせん (変遷へんせん: 時の流れとともに移り変わること)

大字の名称: 明治22年の八村合併以前は大字の名称はなかった。

飯能市に合併以後は九の大字で区別されており次の通り。旧村名がそのまま大字名となっている。

原市場・下赤工あかだくみ・上赤工あかだくみ・赤沢・唐竹からたけ・中藤下郷なかとうしもごう・中藤中郷なかとうなかごう・中藤上郷なかとうかみごう・南小字・中字: 明治八、九年に武蔵国群村詩ができ、地目割台帳ができて山間部まで細分化され、現在に至っている。

しかし中字として古い地名は人々に親しまれ、現在でも呼ばれている。前者の例として房ヶ谷戸、赤沢、畠中等々。後者は石倉、妻沢、萩沢等が立派に生きている。

ちなみに、正保年中改定図村名では曲竹村、赤内匠村、日影村、唐竹村

元禄年中改定図村名と小名(小字)以下の通り

曲竹村 : 小住、山崎 原市場村 : 原市場、房ヶ谷戸、金山、石倉、旧生、妻沢

下赤工村 : 赤工、尾長 上赤工村 : 三辻、新屋敷、渡シ場

中藤村・唐竹村・赤沢村は小名(小字)は省略しました。

明治八、九年小字

上赤工村・下赤工・中藤上郷・中藤中郷・中藤下郷・唐竹村・赤沢村・(原市場村除き省略)

原市場村 : 中、白石、原郷、坂下、中居、房ヶ谷戸、内出、東宝窪、曲竹



7-3.地名の特徴

原市場地区は入間川と中藤川を中心にして、周囲をすべて山で囲まれている関係で、山間部特有の地形から名付けられた地名が多い。

390余りの小字名から上位10は、

1.くぼ(久保、窪)2.いり(入)3.さわ(沢)4.やま(山)5.ざす(指)6.うえ,かみ(上)7.がやと(ヶ谷戸)7.たき(滝)7.はら(原)10.と(戸)10.した,しも(下)

7-5.大字別の地名

原市場：地名の起りはこの地に市場が立ったことから起きたという。

鎌倉時代から原市場の名が見えることから、この当時から市が立っていたと考えられる。

当時の市は、人々が集まって物々の交易の場であって、人家が立て込んでいたわけではない。

俗説として、平将門が戦い破れた折り、愛妾が逃れて西多摩方面に行く途中、持参した品々を市に立てて売捌いたことから、原市場の名が生じたという。

8.屋号の変遷と特徴

徳川時代になると、商工業はもちろん広く盛んになったので、それに類する屋号も多くなつた。

徳川幕府の政策で、兵農分離とともに、苗字帯刀は武士の特権となり、農、工、商の者は、特に、武士に準ずる資格を与えられたも者のほか、公式の場で苗字を名乗ることが禁止された。村々では百姓の間で同名の人が多いと区別に困つた。そこで、各家々を屋号で呼ぶようになった。

明治維新で幕府が倒れ、新政府により苗字使用を義務付けられたが、長い間の慣習から引き続き屋号を呼んで現在に至つた。

しかし、核家族が進み、次々と分家ができ、更に近年建売住宅ができると、自然に屋号もできなくなつた。

また、時代が屋号を必要としなくなり、次第に忘れ去られようとしている。

古い屋号の中で、地名を名乗る家が多いが、それはその土地に一番早く住み着いた旧家と思えば良い。中世武家屋敷に由来すると思われる屋号の屋敷、内出等も各地に散在する。今はなくなった家業の鍛冶屋、紙屋の屋号も今に残つて昔を偲ぶことができる。

新旧を問わず、方角や位置を表わすものに、東、中、西、上(かみ、うえ、かさ)下(しも、した)を付けたもの、また本家を中心にして分家を背戸、西、東、としたものが非常に多い。また、新家(しんや、にや)がたくさんあるが明治以後の分家によるものである。

9.地域の歴史（参考：郷土史略年表、埼玉ふるさと散歩、ふるさと漫録）

曲竹村は江戸初期天領 末期 田安領

- ・明治 7年 曲竹、原市場村に合併。
- ・明治17年 秩父事件起きる。
- ・明治27年 日本が清国に宣戦布告。
- ・明治27年 飯能、入間川間の馬車鉄道が布設

明治末から大正時代、名栗と飯能を結んで乗合馬車が通っていた。

砂利道をゆっくりした速度で走る様は、街道の風物詩であったという。

馬丁がときどきラッパを吹くその音は「テト・テト・乗れ・のれ」と聞こえるのでテト馬車と呼ばれた。

- ・明治27年 日本がロシアに宣戦布告。
- ・大正 3年 日本がドイツに宣戦布告。
- ・大正 4年 武蔵野鉄道が開通。

- ・昭和11年 原市場の倉掛道路工事が完成する。
- ・昭和18年 飯能・精明・元加治・加治・南高麗の1町4ヶ村合併し飯能町となる。
- ・昭和25年 原市場中学校校舎が落成する。
- ・昭和28年 原市場村で戦没兵士の忠魂碑・表忠碑が再建される。
- ・昭和29年 飯能町が市制を施行し飯能市となる。
- ・昭和31年 吾野・東吾野・原市場の3ヶ村が飯能市へ合併する。

名栗に向かうバスの停留所「原市場」は、飯能市へ合併する以前の原市場村の中心地である。

この周りでは何時の頃か市が開かれていたという。

- ・昭和31年 原市場体育協会が設立される。
- ・昭和42年 原市場・南・中藤・赤沢の4つの小学校統合し原市場小学校が発足。
- ・昭和43年 原市場小学校が落成し第1回入学式が行われる。
- ・昭和46年 飯能市統一の第1回飯能まつりが行われる。
- ・昭和48年 原市場小学校の屋内運動場が落成する。
- ・昭和47年 飯能市役所新庁舎が落成し祝賀行事が行われる。
- ・昭和52年 原市場中学校の校舎が火災のため焼失する。
- ・昭和54年 原市場中学校が落成する。
- ・昭和62年 西光寺(原市場)の「西光寺板石塔婆」が考古資料として、
川寺の「大光寺双盤念仏」、落合の「西光寺双盤念仏」が無形民俗文化財
として飯能市の文化財に指定される。



現在の西武鉄道池袋線の前身である武蔵野鉄道(飯能・入間川間)は、大正四年四月十五日(21)に沿線住民の期待のうちに開通しました。それまでの馬車鉄道(飯能・入間川間)と比べ、機械が動力となつてゐるのであります。歩くことがあだりませんが、さぞおどろいたことでしょう。前号の「いかだ流し」でお話しましたように、大正時代に入りましたと、機械文明の発達とともに、地元林業もめざましい発展をとげ、しかも早く大消費地である東京へ送る必要と沿線住民の利便を図るという目的から、鉄道の敷設となつたものと思われます。林業と鉄道の関係は、昭和三十年代までの飯能駅周辺を見ると分ります。周辺には、材木市場が十軒以上も軒をつらね、鉄道を利用していました。その後、自動車輸送の発達によって、市街地周辺部へ移転する工場が多くなりました。ご連絡は、市中細さん係(三八五八へどうぞ)をして木材を消費地に送り出していました。



昭和47年 市役所新庁舎完成

<参考: 飯能市ホームページ>

森林文化都市 飯能市市勢要覧>

10.飯能市近辺の河川について

参照: ウィキペディアは誰でも編集できるフリー百科事典/飯能市ホームページ地域の歴史情報

入間川(いるまがわ)は、埼玉県を流れる荒川水系の一級河川である。上流部は名栗川(なぐりがわ)とも呼ばれる^[2]。荒川の支流としては最長である。標高1,294mの大持山の南東斜面に源を発し[3]、飯能市、入間市、狭山市を流れ、その間に成木川、霞川、越辺川などの支流を合わせ、さいたま市と川越市の境界付近の川越市大字古谷本郷で荒川に合流する。

飯能河原の先、岩根橋より上流[2]の旧名栗村の地域では名栗川と呼ばれているが、埼玉県では「入間川(清流 名栗川)」としている。さらに名栗の「名郷(なごう)」集落より上流の源流域では、横倉入(ナギノ入)と呼ばれている。

古くは荒川は東寄りの現在の元荒川を流れ当時の利根川に合流しており、入間川は単独で下流の隅田川へと流れている。江戸時代の1629年に荒川の付替えが行われ、熊谷市久下から現在の荒川合流点まで開削し、現在の流れが形作られた(利根川東遷事業も参照)。また現在の入間川が荒川に合流するあたりから下流の旧入間川は現在の流路より北部を蛇行して流れている。

今より浦和市街に近い形で、大宮台地を避けて蛇行していた。流路はいくつかの河川や排水路として現在も面影をとどめている。また昭和期の航空写真では旧流路に人家が少なく、岸に沿って集落があったため、くつきりと流路が確認できる。現在の河川では鴨川、大久保排水路、作田排水路、合野谷排水路、田島排水路、辻用水、芝川、毛長川あたりを流れている。

11.「西川(にしかわ)」の名前の由来

西川林業とは、埼玉県南西部の荒川支流の入間川(いるまがわ)、高麗川(こまがわ)及び越辺川(おっぺがわ)流域で行なわれている林業のことです。「西川」とは地名ではありません。江戸時代以降、この地方の村々では、山から切り出した木材を、筏(いかだ)に組み、江戸(東京)に盛んに流送していました。消費地である江戸から見ると「西の川筋から流されてくる木材」のため、『西川材』と呼ばれるようになったと言われています。

西川林業の象徴とも言える、筏流し(いかだながし)についての紹介

飯能市の名栗地区(なぐりちく)、原市場地区(はらいちばちく)などの入間川上流の村々では、山から切り出した木材を筏(いかだ)に組み、江戸(東京)に盛んに流送していました。消費地である江戸から見ると「西の川筋から流されてくる木材」なので、『西川材(にしかわざい)』と呼ばれるようになったと言われています。

筏流しがいつからおこなわれたか、はっきりしたことはわかりません。江戸幕府開府以降、町づくりや、度重なる江戸の大火の復興のために、江戸時代初期から木材を送っていたと言われていますが、それを示す資料は見つかっていません。現在見つかっている筏関係の文書は正徳3年(1713)のもの(狭山市・山崎忠男家文書)が最古で、この時点ですでに多くの筏が流されていたことがわかります。尚、筏流しの歴史 いかだながしのれきし—筏流しの経路 いかだながしのけいろ等は飯能市郷土館資料を参照してください。

